

週刊メッセージ “ユナタン” 1

～ 運動会のバルーン練習風景から ～

平成 27 年 9 月 30 日 片山喜章

9月30日より、毎週水曜日、「子どもの本物の育ちや子どもを取り巻く社会・文化」「乳幼児教育のあり方、取り組み方」について、メッセージとしてお届けします。

※ 個別の園の事例から言及していますから、時には全園の取り組みでない場合もあります。

運動会では 4 歳児の「バルーン」や園によっては 3 歳児の「ミニパラ」の演技が定番種目になっています。「練習中も当日も、先生がいない！」これは法人全体の“教育方針の形”です。具体的な取り組み方を通して、法人の“教育方針”を感じ取っていただければありがたいです。

A園の3歳児のミニパラバルーン。先生たちが選曲し、振付を考えて、夜、残ってがんばって見本ビデオを制作しました。後日、子どもたちは、狭い部屋に入って見本ビデオを視聴します。

「うわ～先生だ～」と感激する子どもたち。それを 2 日間、朝夕 2 回、計 4 回、見ました。そして翌日、3 日目。その日は、幼児体育の大手会社の幹部社員が 2 名、たまたま来園したので「今、ここで演技曲をかけると、はじめてミニパラを手にした子どもたちは、どう動くと思う？私は、バッチリできると思うよ！」と語気を強めて言いました。「たった 4 回視聴しただけで 3 歳児クラス全体が演技できるって！？（冷笑）」。2 人の来客は（担任も少し）懐疑的でした。

いざ、ミュージックスタート・・・。子どもたちはすぐさま反応し、喜色満面でバッチリ見本どおりの振付を披露してくれました。最後の部分、ある女児が「さあ、立って！」と指示する姿も見られました。来客は驚嘆し「目から厚いウロコ」がポロポロ。担任は涙ポロポロでした。

B園の4歳児のパラバルーン。この（教育的）練習法が根付いている園ですから、子どもたちも先生も余裕しゃくしゃくです。実はこの練習法には、大事な続きがあって、そこが重要です。

《見本ビデオを視聴》した後、自分たちが演じた姿を録画してもらう、演技後、それを狭い部屋に入って（集中力を高める環境）《モニターで視聴する》、それを見て《話し合いをする》。

この《3 点》が一連のセットになって、教育的な「練習」に成る、と実感し確信しています。

ですから、演技を撮影されていることがわかっている子どもたちは、毎回、演技終了後即モニター部屋に駆け込みます。振り返りを重ねる度に、話し合い（思考の質）は進化します。

このB園では、最初、出来栄えには関係なく自分（たち）がモニターに写っていることだけで大喜びしたが、次第に出来栄えに目がいって、弱点探しから対策へ話しが膨らみました。（裏へ）

『“ウエーブ” がうまく出来ない。もう 1 度、見本ビデオを見せて』と訴えてきたので承諾。その後、子どもたちは『“ウエーブ” の練習がしたいので、先生、教えて』と依頼してきました。そこで棒を持った先生は、手をつないで円形になった子どもたちを座らせて、その中心に入り、時計の針のように棒をまわします。棒に指されると手を離さないで立って座る、何周も速く回転させるので“ウエーブ” の動きを体感する。この手法（ノウハウ）でコツをつかんでバルーンを持ってやってみる。結果は、驚くほどスキルアップ。作戦成功。子どもたちは満足気でした。

子どもたちの話し合い（思考の賜物）として、先生が教えたのです（ノウハウも法人考案）。先生が上手い出来ない子どもの姿を見かねて教えた場合と決定的に違います。このような「練習」を繰り返すと話し合い自体の意義を体感し、話し合うスキルも演技スキルもアップします。

従来型の「練習」なら、先生は「ここがよかった」と褒め、「そこはもっとこうしたら」と励まします。これを教育、指導だとイメージしている人が大半です。評価する側とされる側に分けられると【社会全体の主体性の総量】は増えず、民主主義の発展に繋がらないと私は独想します。

演技後即ビデオを視聴し、評価し合い褒め合い、より良い作品づくりをめざして意見交換する。的外れの意見が出たり、誰かを責めたり責められたり、痛みや葛藤を味わう事もよくあります。

そんな経験を繰り返しながら、自己主張と他者理解を調節する術を体得すると信じています。たかが「バルーン演技」ですが、この手法が幼児版「アクティブラーニング」だと思います。

ここでは、担任の指導性が質的に変化します。教育方法も従前のものに比べて質的に有効度を高めます。現代の教育問題は、教育する側の「思考の進化」、創意の発揮にあると考えています。

いま、文科省がすすめている「アクティブラーニング」の理念はすばらしいですが、学校現場が柔軟に受けとめて創意ある授業が展開できるかどうか、期待されるところです。子どもよりも先生たちが従来の殻を破って失敗を恐れず工夫できるように、関係者やマスコミ、保護者が応援する環境をつくる。環境づくり、風土づくりが根本課題であると捉えています。（また後日）

A園の3歳児の子どもたちのミニパラは、間奏時に15人ずついるピンクチームと青チームが入れ替わります。そこで混乱が生じます。うまく出来ることは教育目標にはならず、混乱に向き合い「思考力」を主体的にはたらかせた経験、この経験量が教育的価値です。つい先日、自分たちが入れ替わる場面をモニターで見て『う～ん、ズイブン、良くなってきたね～』と3歳児の子どもたちが、悠然と感想を述べ合ったのです。もしも、先生が「こっちこっち、もっと速く～」と逐一指導していたら、こんな姿は期待できません。主体者意識旺盛になった子どもたちの姿に、担任たちは、ただ、口をポカンとあけて、み・て・る・だ・け～、だったとのことでした。